

編 集 後 記

第56回日本消化器外科学会総会が小山会長のもと秋田市において盛会裏に終了した。十分に計画され準備された立派なものであった。その際の評議員会での討論は誠に的を得たものであり、今回の連続した不祥事について評議員の先生方が深く考え、評価し、さらに今後のすすむべき道を模索されている事がひしひしと伝わってきた。理事の一人として会長と共に苦悩し、呻吟してきた1年間であったが、評議員の先生方の議論を聞くにつれ、評議員さらには会員の先生方も共に悩み考えてくださっているという心強さが私の胸に小さい灯をともしてくれた。日本消化器外科学会の発展のため、より明確で明瞭な体制を作り、真に国民のためになる消化器外科学を推し進めるべくがんばりたいと考えるに至った。それにしても、日本消化器外科学会は若い力にあふれ、たゆみなく前進しようとする若々しい学会であるとつくづく感じた。その理由のひとつには、若い評議員が多いこと、すなわち評議員選出方法の斬新さによるものもあるであろう。この制度をぜひ堅持したいと考える。

さて、若さについて思い起こすと、本年4月に“患者には言えない ある医師の告発”という本が発行された。大変尊敬していた先輩の著書であったので、早速買い求めて読んでみた！「どうしたんだろうか」と思った。確かに「なるほど」と思えるところも多くあったが、全体的に20年前30年前の感覚であり、現在の医療、医学会、大学、教室、教授、医師の概念と合わない点も少なくなかった。「昔はそうだったのか」と思うと共に何か硬く凝り固まった極端な話の進め方は、独善的であり、後向きで、読者の共感を得るものではないように思われた。読後に「なるほど、それではこうしよう」という前向きの明るさが出てこない。今こそ真に患者のための、国民のためになる医療を実現すべく日々努力を重ねるとともに、この本のような事を言わないですむように、心安らかな老人となるように精進したいと思っている。自戒の意味で手元に置いておきたい本である。

さて本誌の編集は委員長以下、委員の先生方の真摯な努力により、厳しく優しい指導がなされ、良い論文を書く力をつけることの助となっていると思っている。今後は、さらに倫理面でも高いものを求めていくと共に、日本消化器外科学会が開かれた明るい前向きの学会として発展していく一翼を本誌が担っていきたいものである。会員の皆様のご協力を是非お願いしたいと考えている。

(幕内博康)